２０２０年度　ソニー幼児教育支援プログラム

科学する心を育てる

～豊かな感性と創造性の芽生えをはぐくむ～

「思いを寄せる」

～自然とつながる『きっかけ』に着目して～

京都市立明徳幼稚園

目　　次

Ⅰ　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　１　園内研究について

　２　今年度の保育について

　３　科学する心の捉え方

Ⅱ　実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　１　４歳児
　　（１）オオケマイマイとの関わりを通して
　　　　思いを寄せる『きっかけ』と思いの「深まり」
　　（２）カエルとの関わりを通して
　　　　そうすけのカエル①　～思いを寄せて“自分の”カエルになる～
　　　　そうすけのカエル②　～カエルの死に直面し，「深まる」思い～
　　　　そうすけのカエル③　～カエルになる喜びとともに思いが「深まる」～
　　　　そうすけのカエル④　～「好き」だからこそ揺らぐ思い～
　　（３）オクラとの関わりを通して
　　　　ゆうとのオクラ①　～親子で植えたことを『きっかけ』に思いを寄せ始める～
　　　　ゆうとのオクラ②　～親子で思いを寄せて「好き」になる～
　　　　タイムラプスの動画で発信　～保護者の関心の高まりが親子で思いを寄せる『きっかけ』に～
　　　　みのるのオクラ　　～タイムラプスの動画を『きっかけ』に親子で思いを寄せる～

　２　５歳児
　　カタツムリとの関わりを通して
　　　　カタツムリに思いを寄せて①　～再会が『きっかけ』になり思いを寄せる～
　　　　カタツムリに思いを寄せて②　～思いを深く寄せることで「好き」の気持ちが膨らむ～
　　　　カタツムリに思いを寄せて③　～友達と“共感”することで「深まる」思い～
　　　　カタツムリに思いを寄せて④　～思いを“共有”そして新たな『きっかけ』へ～

Ⅲ　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
　１　生き物に「思いを寄せる」ことと「科学する心」について
　　　～『きっかけ』に着目して～
　２　課　題

Ⅳ　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

２０２０年度　ソニー幼児教育支援プログラム

科学する心を育てる

～豊かな感性と創造性の芽生えをはぐくむ～

「思いを寄せる」
～自然とつながる『きっかけ』に着目して～

Ⅰ　はじめに

１　園内研究について

本園は，京都市の東北部に位置し，周囲を山や田畑に囲まれた自然豊かな立地である。日頃より，本園の子どもたちは，自然に親しんでいる。

そこで，本園では昨年度より「自然との関わりを通して子どもの育ちを捉える～資質能力の３つの柱の視点から～」というテーマで，園内研究に取り組んできた。

昨年度は，園内や地域の“自然”環境を生かし，豊かな自然と関わる中での子どもの育ちを明らかにするために，様々な子どもたちの姿を見取ってきた。教師が，自然と関わる子どもの育ちを意識することで，園内環境をより興味をもって自然と関われるよう見直してきた。虫ハウスや手作りビオトープなどを作り，園内の生き物があるがまま存在するだけではなく，より子どもの身近なものになるように工夫を重ねた。また，家庭との連携を図り，自然と関わる子どもの育ちを共有することで，保護者も自然物に関心が高まり，虫や虫のえさを持参したり，家庭で園と同じ植物を栽培したりするなど，昨年度の後期では，保護者の自然に対する意識が高まってきたことが伺えた。

研究を進めてきたことで，“自然”とは，未知なるもの，変化のあるもの，自分の思うようにならないものであり，それと出会っていくことで，心が動き，意欲が高まり，学びに向かう力が，“自然”を通して総合的に育っていくのではないかと考えられた。また，意欲的にとことんよく見たり，たくさん集めたりしようとする中で，様々な思いを巡らせ，予想し，そのことが思考力につながっているのではないかということも捉えられた。

今年度も同様のテーマで園内研究を継続していくが，より一層子どもたちが興味・関心をもちながら主体的に関わっていくことができるような環境構成，援助を今後も考えていきたい。

２　今年度の保育について

今年度の保育は，新型コロナ感染拡大防止の緊急事態宣言発令のため，新入園児である４歳児は入園式の翌日から，５歳児は始業式の翌日から，臨時休園となった。５月１８日よりグループ別の分散登園が始まり，６月１５日からようやく全園児そろって毎日登園する保育がスタートした。子どもたちは，久々の登園にもかかわらず，安定した気持ちで園生活を楽しめていた。分散登園期間中には，園庭に“チョウの家”を設置したり，テントを立ててその中に花のプランターを用意し花びら集めをしたり，花びらで色水づくりができるように用具を用意したりして，園内の自然環境に興味をもって関われるように意図的に環境設定をしてきた。また，感染防止のため，全員で集まって話し合う機会を設けることが難しいため，教師はできるだけ，遊びの中で，子ども同士をつないだり，経験を共有したりできるような役割を果たそうと，今まで以上に意識的に援助してきた。

このように今年度の実践としては短い期間ではあるので，昨年度の姿から継続して捉えていきたい。

３　科学する心の捉え方

本園の子どもたちは，自然環境に恵まれて育っているからか，家庭からも地域の公園や様々な場所に出かけて遊ぶ経験があり，自然物に親しんでいる子どもが比較的多い。

園庭では，春から夏にはカエルやオタマジャクシ，いろいろな種類の蝶やその幼虫，カタツムリ，カナブン，カミキリムシ，カブトムシ，クワガタ　夏から秋にはトンボ，バッタ・・・・・季節によって様々な昆虫が生息しており，子どもたちは，見つけたり捕まえたりすることを楽しんでいる。また，花や野菜などの栽培物も遊びに取り入れている。

子どもたちにとって，自然物という対象物は，親しみのあるもの，知っているもの，好きなもの，興味・関心があるもの，おもしろいものであり，それらに関わることが『きっかけ』となり，その時々に，子どもたちは心を動かしている。心が動き，対象物に関わり，関心を深めていく過程の中で，よりそのものへ「思いを寄せて」いく。*「この虫何かな？」「何を食べるのかな？」「なんでこうなるのかな？」「大きくなるようにお水いっぱいあげよ！」「今，朝ごはん食べたはるんや」*など，「思いを寄せて」いくことによって，対象物に対する気付き，試しがあり，不思議さや未知なるものをより知ろうとするなどの行動が生まれ，深く見つめていく中で心が揺らぎ，思いや考えを巡らそうとする。そのような心の動きが思考や探究へとなり，その過程が科学する心の育ちにつながるのではないかと考える。

そこで，私たちは，それらの過程が一過性で終わらず，遊びが継続することでより一層思いを深め，思考や探究などの科学する心の育ちにつながると考えることから，思いが深まっていくために必要な『きっかけ』に着目し，子どもが「思いを寄せて」いく姿から，自然物に対する「思いが深く」なっていく心の動きを探っていきたいと考えた。

自然との関わりの中で，好きなもの，興味のあるものに「思いを寄せて」いくことから始まる科学する心の芽生えを見逃さずに育んでいきたい。また，自然物に心を動かし，主体的に関わる『きっかけ』となるような魅力的な環境構成や教師の援助の見直しを図り，充実させていきたい。

Ⅱ　実践事例　　（名前はすべて仮名）

１　４歳児

（１）オオケマイマイとの関わりを通して

思いを寄せる『きっかけ』と思いの「深まり」

「オオケマイマイがいっぱいいるねん」　　令和元年７月１日（月）

入園当初より，ダンゴムシを見つけたことがきっかけになり，生き物を見つけることを楽しんでいた。

雨あがり，６人の子どもたちがカエル探しに出かけた。しばらくすると，「オオケマイマイがいっぱいいるねん」と言うので見に行った。本当にたくさんのオオケマイマイで，地面を見下ろすと誰かが散りばめたのではないかというくらいあちこちにいた。子どもたちはどんどん飼育ケースに集めている。あまりにもたくさんだったので「何匹くらいいんのかな？」と投げかけてみると，子どもたちは飼育ケースから地面にバラバラっと出し，オオケマイマイを一列に並べ，飼育ケースに一匹ずつ戻しながら「４１，４２，４３…」と声をそろえて数えていた。「４５，４６…４６ぴきや！」と数えると，まだまだ見つけに行くことになり，更にたくさんのオオケマイマイが見つかった。私は，「このことをクラスのみんなに教えてあげたい」という６人の思いを感じ，昼食前に知らせる場を設定することにした。すると，６人の話を聞いたちかが「ちかも後から探したい！」と興味をもった。昼食後，ちかはオオケマイマイを探しに行った。ちかも他の子どもたちもたくさん見つけ，飼育ケースはいっぱいになり，１００匹近くになった。最初小さな飼育ケースに入れていたが，誰かがいつのまにか大きな飼育ケースに入れ替えていた。

【オオケマイマイ】
カタツムリの仲間。平べったい形をしていて，毛がはえている。幼稚園の園庭にたくさん生息している。

「ちかのミニトマトあげたい」　　令和元年７月５日（金）

オオケマイマイが毎日のように見つかることを喜んでいた。しかし，どう飼育するか不明な点もあり，「オオケマイマイを一旦お家に戻してあげて，ご飯食べてきはってからまたお出会いしよっか？」と，週末でもあったので，逃がす提案をした。子どもたちは「いいよ」「一回お家に返してあげよう」などと言い，誰も反対しなかった。子どもたちは，すぐに逃がしに行った。「ここにご飯がいっぱいあるかも」「お家はこの辺かな。ここでいっぱい見つかったし」「また会おうね」と見送った。

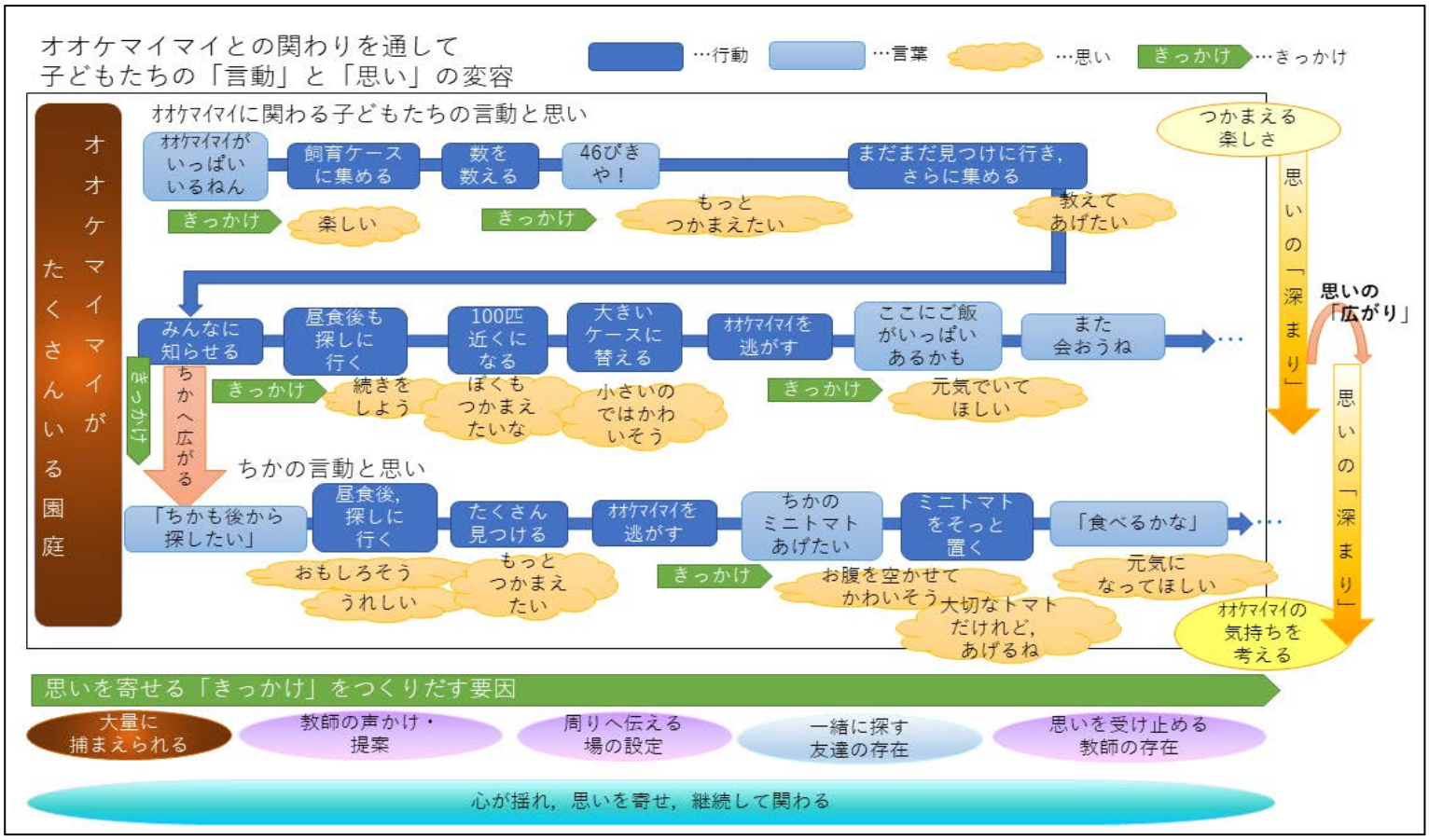
そんな時，ちかが「ちかのミニトマトあげたい」と話すので，「えっ？いいの？」と聞き返した。それは，一人一鉢で育てている自分のミニトマトがやっと赤くなり出したところだったこと，またカタツムリがトマトを食べるとは思えなかったからだ。「いいねん。あげたい」と赤くなったミニトマトを取りオオケマイマイを返した所にそーっと置いた。私はその姿を見守った。「食べるかな」とつぶやくちかに「食べるかな。おいしそうなちかちゃんのトマト，喜ばはるね」と話すと「うん」と嬉しそうな表情だった。

【考察】

園庭で，多くのオオケマイマイが見つかり，簡単にたくさん取れたことが嬉しく，それが『きっかけ』となり思いを寄せ始めた。週末に「ご飯を食べに帰らせてあげよう」という私の提案に子どもたちは簡単に了承したので“「思い」はそれほど寄せていなかったのかな”と思ったが，逃がしに行く時「ここにお家があるかもしれない，ご飯があるかもしれない」とオオケマイマイのことを思って話していた姿を見て，毎日一緒に過ごす中で，言葉にはしていないものの，大事にしたい気持ちへと「思いを深めて」いたのだと感じた。また，“小さなケースではかわいそうだ”と思い，大きいケースに替えるという，オオケマイマイの立場に立って考えるようになった行動も思いを寄せて「深めて」いると言えるだろう。

ちかは普段から何事にも興味津々で，誰にでも素直に優しい気持ちでかかわっている。この時も，友達の話を聞いて，自分も捕まえたいと興味をもったのだろう。そのことが，ちかがオオケマイマイに思いを

寄せる『きっかけ』となり，そしてたくさん見つけられたことを喜んでいた。ちかはミニトマトをとても大事に育てていた。そのミニトマトをちかが「あげたい」と言ったのは，オオケマイマイは“お腹を空かせているから，何とかしてあげたい”と思いを寄せていたからであり，そこで「深い思い」が芽生えているのだなと感じた。“今すぐに食べられるもの”と思ったのがやっと赤くなったミニトマトであり，それをオオケマイマイが食べるか食べないかにかかわらず，思いを寄せていたからこその必死の行動だったこと，その一生懸命さから「寄せている思いの深さ」が見取れる。



図のように，園庭にはオオケマイマイがたくさん生息し，大量に捕まえられることが『きっかけ』の土台となっており，教師の意図的な場の設定や援助，一緒に探す友達がいることなど，『きっかけ』をつくりだす様々な要因があることが分かった。そして，それらの『きっかけ』を通して子どもたちの思いが少しずつ変容している。当初は，どんどん捕まえられること，増えていくことでオオケマイマイへの思いを膨らませていたが，“継続して関わる”中で，オオケマイマイの気持ちを考えての言動や思いへと変わった。また，ちかのように，友達の姿を見たり聞いたりしたことが『きっかけ』となることもある。個々の姿を見てみると，一人一人の思いの寄せ方があり「深まっていく」過程があることが分かった。

（２）カエルとの関わりを通して

そうすけのカエル①　～思いを寄せて“自分の”カエルになる～

「そうすけのカエル」　　令和２年６月２３日（火）・２４日（水）

この時期，園内にはたくさんの小さなカエルたちが草むらの中から顔をのぞかせる。それと同時に，子どもたちもカエルを捕まえようと草むらとにらめっこが始まる。

この日，そうすけは初めてカエルを捕まえた。そうすけは飼育ケースを丁寧に洗うと，その中に土と葉っぱを入れた。遊んでいる間は，カエルを常に手の中におさめ，どこ行くのも共に行動していた。こちらから見ると少々扱いが荒いように見えたが，“そうすけのカエル”として大切にしていた。

次の日も飼育ケースからカエルを取り出すと，まるで新しくできた友達のようにうれしそうに連れて

歩き，遊んでいた。「どこでもひっつくで」と壁に張り付かせて見せたり，2 本の前足でぶら下がったりすることもできるのだと周りの友達や先生に見せて回ったりしていた。

【考察】

そうすけの初めてカエルを捕まえたというううれしさが，カエルへ思い寄せる『きっかけ』となった。どこに行くにも連れて歩くカエルに，そうすけがどれほど思いを寄せていたのか想像することができる。こちらから見ると少々手荒く扱っているように見えるが，カエルを握る手は優しくカエルを包み込むようにしており，決して粗末に扱っているのではない。一緒にいる時間が進むにつれ，カエルへの思いが「深まっている」。そこらのカエルではなく“そうすけの”カエルになっているのだ。だからこそ，カエルのおもしろさ（ひっつく，ぶら下がるなど）に気付き，自慢するように周りに見せて回ったのだろう。

そうすけのカエル②　～カエルの死に直面し，「深まる」思い～

「先生，一緒に埋めに行こう」　　令和２年６月２４日（水）

降園前のこと，ふと飼育ケースを見ると中にいるはずのカエルがいない。私が「カエルどこ行ったん？」と聞くと，そうすけは「土の中に入れてあげた。だって暑いから，土の中の方が涼しいやろ」と答えた。「土の中でも大丈夫なん？」と聞くと，そうすけは大丈夫であることを見せようと，土の中を探ると，カエルが力なく，動いていない。そうすけは「水に入れてあげると夜になったら起きる」と言い，空き容器に水を入れ，その中にカエルを浮かばせた。「今は寝てるだけ」と言っていた。私は「死んでいる」ことをわかっていたが，そうすけの気持ちを様々に汲み取りながらも，探ってみたいと思い，そうすけのしたことを受け止め，見守った。

次の日，そうすけはカエルを持ち上げたが，カエルの体はだらんとなっていた。そうすけは何か言うわけでもなく，表情に出るわけでもなかった。カエルを一度置くと，友達と積み木遊びを始めた。私は“あれ？カエルはもういいのかな？”と思い，「そうすけくん，カエルどうする？」と，すぐに声をかけた。その言葉を聞くや否や，そうすけはこちらを向き，「先生，一緒に埋めに行こう」と答えた。かえるは幼稚園の隅の人気の少ない所に埋めた。

【考察】

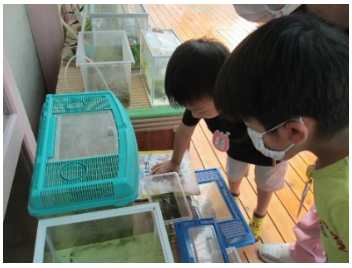
この日は天気もよく降園の昼前には汗ばむほど暑くなった。“涼しい方がカエルは喜ぶだろう”とカエルの気持ちを考えて，自分なりの方法を考え出したのだろう。振り返ってみると，カエルが動かないということが分かった後のそうすけの言動には，様々に揺れる思いがあったように思う。“何とか動くようにならないだろうか”“次の日になったら動いてほしい”と願う気持ちや“死んでいることを認めたくない気持ち”，“やってしまったことに後ろめたく思う気持ち”などが絡み合って，どうにも表現することができなかったのではないだろうか。私の声かけが後押しとなり「先生，一緒に埋めに行こう」という言葉を発した。最後にお別れがしたいという思いが込められているように感じた。

母親にこの時の様子を伝えた時，「そうすけがカエルをこんなに『好き』になったのは初めてかもしれません」と，“埋めてあげたい”と思ったそうすけの気持ちに感心しながら言っていた。初めてカエルを捕まえ，“自分の”カエルとしてともに過ごし，思いを寄せ続けたことが，“こんなに「好き」”にさせたのだろう。そうした中で死に直面し心が揺れ動き，思いが更に深まっていた。

そうすけのカエル③　～カエルになる喜びとともに思いが「深まる」～

「もうすぐオタマジャクシになりそう！」　　令和２年７月１日（水）

いつも田んぼ遊びでお世話になっている地域の方からオタマジャクシのたまごをいただいた。たまごは臨時休業期間中に孵化し，オタマジャクシとなった。



　そうすけはオタマジャクシに足が生えていることに気が付いてから，毎朝オタマジャクシの変化を楽しみにするようになった。「先生，大きくなってる」「手が出てる」などと毎日伝えに来た。そうすけと私は登園後に一緒に観察することが日課となった。

　この日もそうすけは登園してすぐにオタマジャクシを見に行った。

そうすけ「見て！もうすぐカエルになりそう！」

　その声を聞き，周りの子どもたちも集まってきた。ここまで来たら変化も早いのか，一夜にしてまんまるだった顔はまさに「カエル」の顔つきになった。水槽の壁にもひっつくようになった。そうすけたちはしばらく黙って眺めていた。

　そうすけは「そうすけが見つけた」と，周りの人たちに「これは“そうすけの”だ」と知らせるかのように何度も言っていた。そうすけは自分の手の中に入れたり，跳んで逃げるカエルに「おい，待て」と連れ戻したりし，とても嬉しそうだった。

【考察】

　生き物に興味をもったそうすけは，オタマジャクシの足が生えてきたことに気付き，それが思いを寄せる『きっかけ』となった。生き物は，日々変化が感じ取れるほどすぐに成長するものではない。毎朝観察を続けていたからこそ「大きくなってる」「手が出てる」という小さな変化に気付き，喜びを感じていたのだろう。

　オタマジャクシの時からカエルになるまで思いを寄せてずっと見守ってきたカエルである。カエルの姿になっていくにつれ，愛しい思いが「深まっていく」感じは，私も一緒に見守ってきた仲間として共感できる。我が子が生まれた時，とは言いすぎかもしれないが，「よくがんばった！よくぞカエルになった！」と言いたくなるほどこのカエルへの愛着は大きい。黙って眺めるそうすけは言葉を発さなかったのではっきりとは言えないが，カエルになるまでの日々を振り返り，喜びを噛みしめる思いで見ていたのではないだろうか。だから“そうすけの”カエルとして自分のものにしたかった気持ちも理解できた。

　そうすけにとって，先の“死に直面した”のとは逆の“生に直面した”経験もしたことでカエルへの思いが更に深まっていることが，カエルと遊んでいる様子から感じることができた。

そうすけのかえる④　～「好き」だからこそ揺らぐ思い～

「逃がした方がいいな」　　令和２年７月１３日（月）

　カエルを好きになったそうすけは毎日のようにカエルを捕まえては飼育ケースの中に入れていた。カタツムリも捕まえて一緒に入れていた。飼育ケースの中に自分が捕まえた生き物が増えていくことがうれしいようだ。これまでにカエルにえさを与えられず死なせてしまうこともあったが，そのたびに埋めてはまた捕まえと，繰り返し楽しんでいた。

　週明け，そうすけの飼育ケースの中にいるカエルとカタツムリを教師と二人で見ていた。みんないるかなというように，指でさしながら確認していたそうすけ。私が「みんな元気でよかった」と言うと，そうすけは少し間を空けてから「逃がした方がいいな」と言った。私が「えっ？なんで？」と聞くと，そうすけは「だって，えさがないと，かわいそうや」と答えた。数日前の干からびたカエルを埋めたことでそのように考えたのかと思い，一緒にカエルを返した。

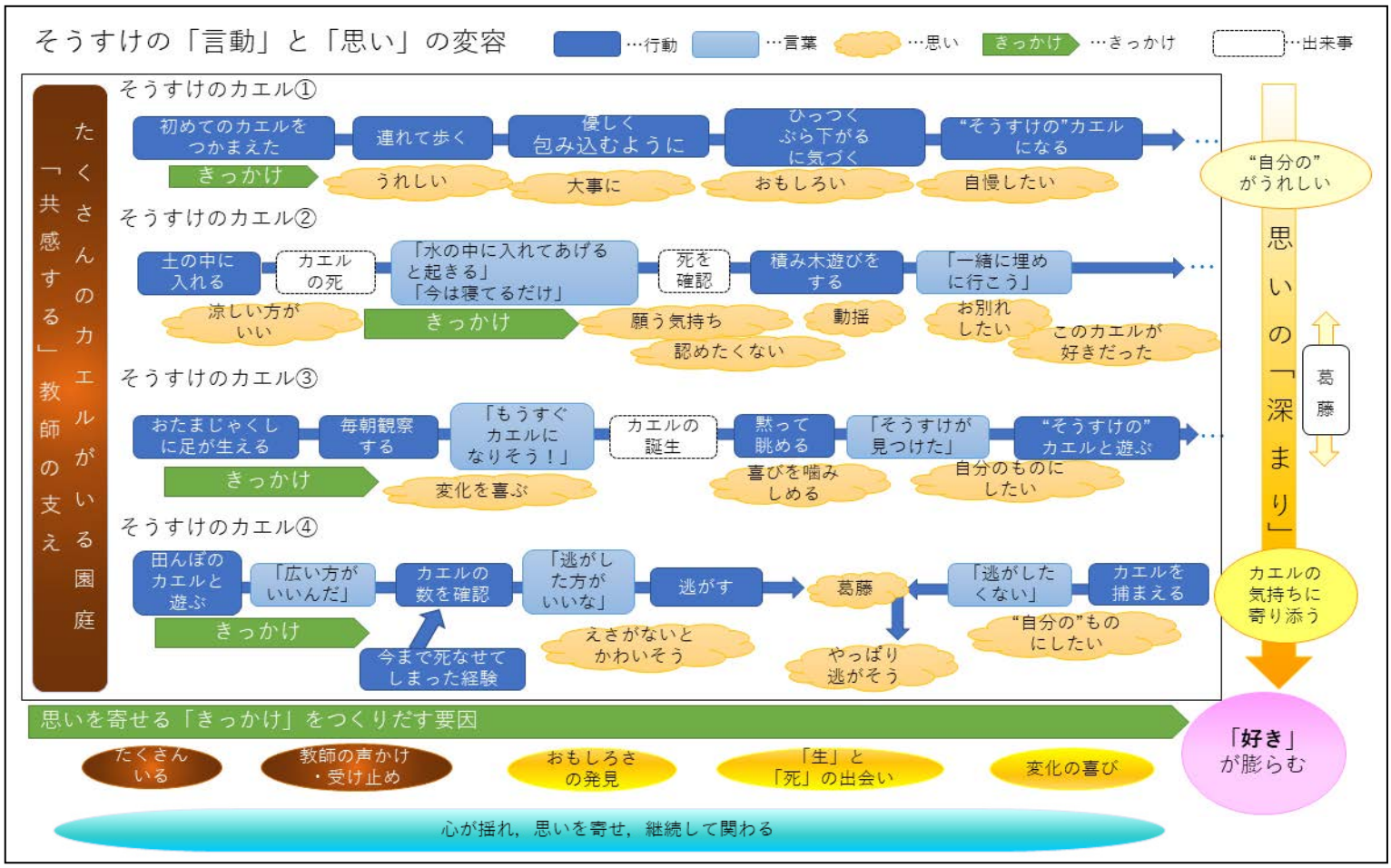
　降園時，母親に今日の姿を話すと，母親が「今日幼稚園に行くときに，人が通ったらカエルがびっくりして田んぼに向かって逃げる様子がおもしろくて繰り返し遊んでいたんです。そして，しみじみと一言『あー，カエルは広い方がいいねんなあ』って言ってました」と話してくれた。そのことを聞いて今日のそうすけの行動が理解できた。母親と二人で優しい気持ちをもっているそうすけの行動を喜び合った。

【考察】

カエルはえさを与えることが難しく，飼育ケースの中で生きていくことができない。えさとなるもの（ダンゴムシやミミズ，小さい虫など）をそうすけと一緒に探し，与えてはみたが食べることはなかった。捕まえたい，でも死んでいく・・・そうすけ自身がそこまで深く思っている様子は感じられず，私自身がどのようにしたらよいものかと悩んでいた。

ところが，そうすけも言葉では表現できなくても，死んでいくカエルのことが心に留まっていたのかもしれない。そして，幼稚園へ来る道中のカエルとの遊びが『きっかけ』となり，「広い方がいいんだ。逃がした方がいいな。」と決心するに至ったのだろう。そうすけはカエルのことをどんどん「好き」になり，「好き」だからこそ，“自分の”カエルとして“ずっと捕まえておきたい”気持ちから“広い方がいいんだ”とカエルの気持ちになって寄り添えたのかもしれない。

その後もカエルを捕まえては飼育ケースの中に入れていた。“自分の”カエルでいてほしい気持ちももっている。夏休み前にはそれまで捕まえた“自分の”カエルを「逃がしたくない」と言った。だが，一緒に捕まえた友達の後押しや，「広い方がいいんだ」と逃がしてあげた経験があったことから，渋々であってもカエルの幸せを考え“逃がす”ことができたのだ。カエルが「好き」だからこその揺らぐ思いを受け止めたいと思った。



図のように，そうすけがカエルに思いを寄せる『きっかけ』の土台となるものは“たくさんのカエルがいる園庭”と“共感する教師の支え”である。また，生き物の“生”（実際は「変態」していく過程）と“死”に出会ったことが『きっかけ』となり，そうすけの心を動かした。これは“生き物”が対象物であることの特有の魅力なのかもしれない。“自分の”カエルになることが嬉しかったそうすけの「思い」は様々な『きっかけ』を通して，“動揺したり”“葛藤したり”と心を揺れ動かしながら，“カエルの幸せを優先してあげたい”思いへと「深まって」いる。そうして，そうすけのカエルのことが「好き」という気持ちが膨らむのと同時に生き物の命を大事にすることへとつながっていった。

（３）オクラとの関わりを通して

ゆうとのオクラ①　～親子で植えたことを『きっかけ』に思いを寄せ始める～

「ゆうとの方が大きい」　　令和２年６月１日（月）

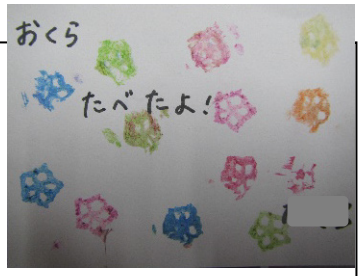
ゆうとは自分のオクラと隣のオクラを見比べていた。指をさして何度も見比べている。二つのオクラを見てみると，ゆうとのオクラの背丈の方が隣のオクラより高かった。私は，ゆうとが指をさして確認している動きに合わせて「ほお」「あー」と声を出した。ゆうとは「ゆうとの方が大きい」と小さい声で言った。私も「ほんとだ」と言った。

【考察】

親子でオクラを植えた日からゆうとは親子で毎日観察するようになった。臨時休業明け，久しぶりの登園で母親から離れにくいゆうとにとって，この時間は気持ちを落ち着かせる時間となっていた。

母親から離れた後も自分のオクラの前に座って眺めることで自分の居場所となることができたようだ。母親と一緒に植え，毎朝一緒に様子を見て，安心する場所となったことがオクラに思いを寄せる『きっかけ』となった。この日，自分のオクラの方が他のよりも大きくなっていたことを母親に喜んで話していたそうだ。

ゆうとのオクラ②　～親子で思いを寄せて「好き」になる～



「おくら　たべたよ」　　令和２年７月８日（水）～９日（木）

実が少しずつ大きくなり，いよいよ収穫の時がきた。ゆうとははさみでオクラを切りとると，すぐに母親に見せた。「ゆうと，やったね。おうちで食べようね」と母親も嬉しそうだった。ゆうとはすぐに自分のリュックにしまいに保育室へ戻った。

次の日，ゆうとが母親に促され私に手紙を渡してくれた。母親が書いた“おくら　たべたよ”のメッセージとオクラのスタンプがいろいろな色で押されてあった。母親は「先生，ゆうとやりました。初めて食べたんですよ。涙が出ました」と話してくれた。細く切ったオクラを少しだけかじって食べたそうだ。私がゆうとくんに「がんばったなあ。やったなあ」と声をかけると，ゆうとはこくりとうなずいた。

【考察】

楽しみにしていた“収穫”を『きっかけ』にオクラへの思いが深まった。好き嫌いが多いゆうとは野菜をほとんど食べないそうだ。母親は細かく刻んで食材に混ぜるなど工夫されていると聞いた。「涙が出ました」の中に日々の努力が伺われる。母親の喜ぶ姿を見て，ゆうと自身の喜びも増したことだろう。

毎日生長を見守り，収穫することを楽しみにしたこの期間の中でオクラへの思いが「深まって」いる。苦手だけど“食べようとした”“少しだけかじって食べた”ゆうとの行為がオクラへの思いの深さを想像することができる。

私はゆうとの手紙を母親の了解を得てホームページに載せた。この親子のやったことを讃えたいと思ったことと，この喜びを「広げたい」と思ったからである。ゆうとも母親もアップされた手紙を見て喜んでくれた。ある母親は，うちの子のオクラはまだ小さいけれど，親子で収穫する日を楽しみにしていると教えてくれた。とったオクラをどんなふうに調理したかなど母親同士で会話する姿も見られた。

ゆうとは今では，好きな食べ物は「オクラ」と答えるほど，好きになり，自信になっていた。

タイムラプスの動画で発信　～保護者の関心の高まりが親子で思いを寄せる『きっかけ』に～

オクラの生長をタイムラプスで撮影する　　令和２年７月８日（水）

登園して，親子でオクラの様子を見ながら「大きくなってるね」などの会話が聞こえてくる。週明けは

特に変化が分かりやすい。植物でもやっぱり生きてるんだって実感が沸く。朝咲いていたオクラの花が夕方には萎む。じっと見ていてもその変化はなかなか感じられない。いつの間にか，そうなっている。私は試しにスマートフォンでタイムラプスの動画を撮ってみた。撮ったのはゆうとのオクラだ。約１２時間の撮影で，オクラの大きさの変化は分かりづらかったものの，無風状態の室内なのに，葉っぱがゆらりゆらりと揺れていた。私はとてもおもしろいと思った。

令和２年７月９日（木）

この動画をすぐにゆうとと母親に見せた。母親も私と同じように驚き，喜んだ。ゆうとは言葉には出さなかったものの，動画に写っている自分のオクラを繰り返し眺めていた。

令和２年７月１０日（金）

撮影時間を長くすることでオクラの実が大きくなる様子が撮れるかもしれない。オクラが生長して大きくなる動画はインターネットで検索したら簡単に見ることができる。しかし，“自分の”（“友達の”）オクラを撮影したものだと分かると子どもたちの受け止めも違うだろう。撮影の準備から開始までを子どもたちと楽しみを共有しながら行った。

２回目の撮影は週末を迎える金曜日の保育中～月曜日の朝（約７２時間だが，実際見せたのは必要な部分を編集し約４８時間）である。動画を見るだけでなく，見るポイントを示した方が分かりやすいと考え，担任のナレーション付き。「無風状態なのに揺れていること」「オクラの実が伸びていること」がポイントである。オクラの実をズームアップすることで更に伸びていることが分かりやすくした。

編集した動画を保育室にパソコンを置き，子どもたちが見られるようにしたこと。また家庭でも見ることができるように YouTube にもアップした。

夏休みはオクラを家に持って帰っての栽培となるため，夏休み直前となるこのタイミングでオクラへの関心が親子で高まり栽培を楽しんでほしいと思った。

【考察】

子どもたちは「オクラが大きくなっていた」「葉っぱが揺れてた」「先生の声が聞こえた」「楽しかった」という反応が多く，“オクラは少しずつ生長しているんだ”と感じられることには個人差があった。

それより反響が大きかったのは保護者の方だ。「オクラが生きているのがよく分かった」「初めて大きくなっているところをみた」など，関心が高まった様子である。これから親子での栽培活動が始まるにあたって，保護者が関心をもつことで子どもへの働きかけも変わるだろう。タイムラプスの動画を YouTube で全家庭に発信することでオクラへの思いが「広がる」ことにつながった。

みのるのオクラ　～タイムラプスの動画を『きっかけ』に親子で思いを寄せる～

とりかえたかったけれど　　令和２年８月７日（金）

みのるのオクラは他のオクラよりも生長が遅かった。そのことは本人が一番気にしており，ある日母親に「他のオクラとかえてほしい」と訴えていたそうだ。他の子どもが収穫を喜んでいる中，みのるは一学期中，一度も収穫ができなかった。みのるのオクラは少しずつ大きくなっており，花も咲き，小さな実が見えてきたころだった。母親も私も「大丈夫。大きくなってるよ」と声をかけていたが，みのるは不満そうな表情を浮かべていた。

夏休みに入り，電話で話をする機会があったため，気になっていたオクラについて聞いた。みのるは家で母親と YouTube を見て，「大きくなってるな！」と嬉しそうに話していたそうだ。夏休みも母親と一緒

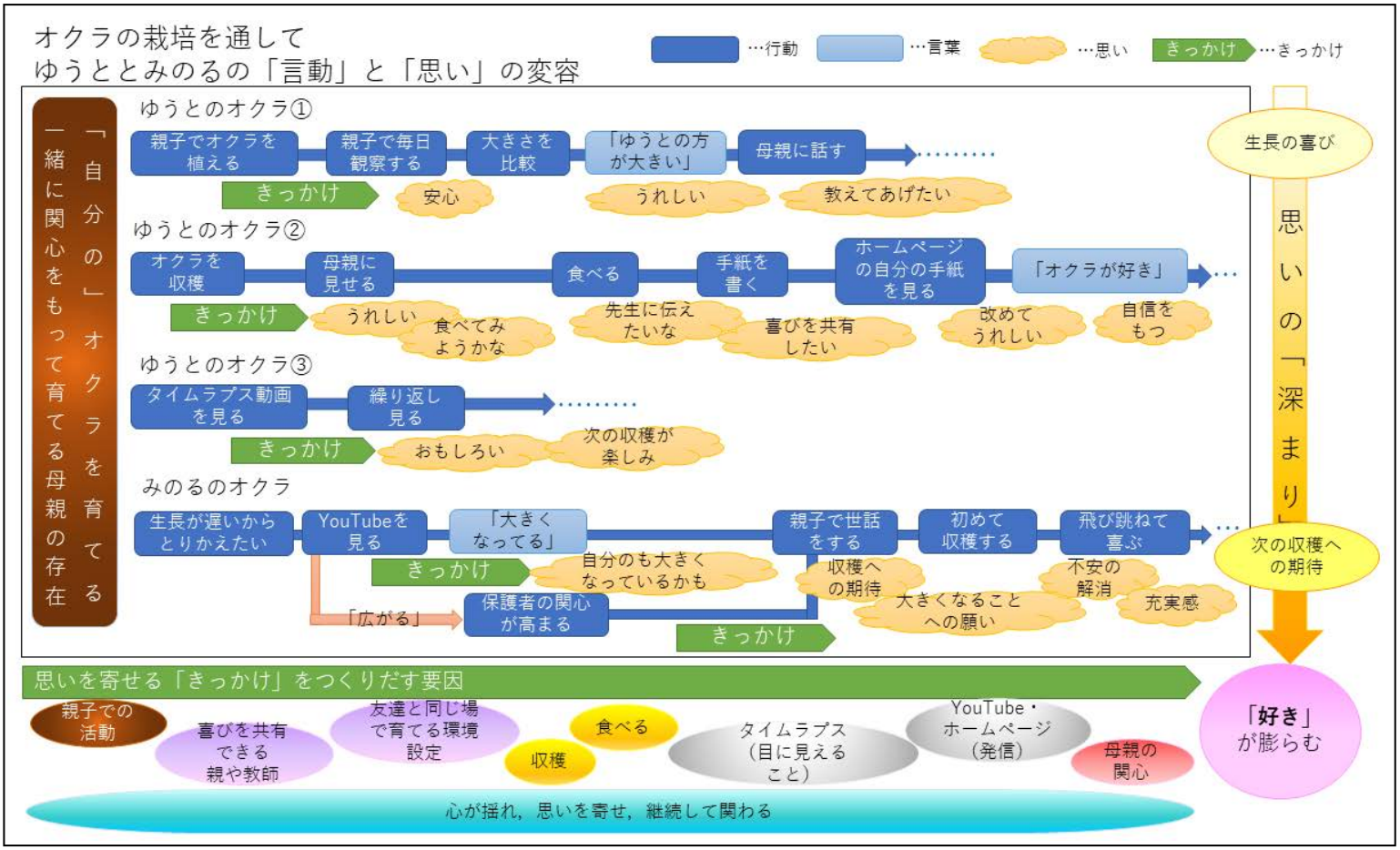
に水やりをがんばった。そしてついに収穫の時。みのるはこれまで以上に飛び跳ねて喜んでいたそうである。そして次に収穫できそうなオクラを眺めながらいつも楽しみにしていると聞き，嬉しく思った。

【考察】

夏休みに入り，子どもたちは自分のオクラを家で世話をしている。YouTube で発信して以来，保護者から「肥料はどれぐらいの頻度であげた方がいいか」という質問を受けたり，「夏休みに入ってから何本か収穫している」と喜びの声を聞いたりなど保護者の栽培への思いが「広がった」。

みのるにとっても，YouTube を見ることで，オクラへの思いを取り戻す『きっかけ』となった。そのタイムラプスの動画が，オクラが生長していることの気付きや自分のオクラもこれから生長していくことの期待へと変えた。母親と一緒に見ることで，「みのるのオクラもきっと大きくなって，もうすぐ収穫できるよ」と収穫の日を楽しみになるように声をかけ，みのるの気持ちを支えたことだろう。

“母親と一緒”に気持ちを共有できたからこそ，“喜び”も大きい。みのるにとっては一度気持ちが“落ち込んだ”からこそ，喜びはひときわ大きかったことだろう。“次の収穫”を楽しみにするとともに，“自分の”オクラへの思いが「深まっている」と感じ取れる。



親子で植えて毎日一緒に世話を楽しむ“自分の”オクラであることが思いを寄せる土台となり，オクラの生長を継続して観察することで思いを「深めて」いる。“自分の”であると同時に“友達のも一緒に”同じ場にあることで，そのことも思いを寄せる『きっかけ』となっているようだ。また，植物の“収穫”は心を動かす大きな『きっかけ』であり，思いが深まっているほど喜びも大きい。そして次はいつ収穫できるかなと更に思いが膨らむ。ゆうとのようにオクラが「好き」なものへと変容していく。

タイムラプス動画は“見える”ことで更に思いを寄せる『きっかけ』となった。４歳児には早送りの動画であることへの理解が難しいところもあったが，保護者の関心の高まりが親子で栽培を楽しむことへとつながり，おもしろさを“共有”することの大切さを感じるとともに，“視覚的”に発信できるタイムラプス動画のよさを実感することができた。

２　５歳児

（名前はすべて仮名）

カタツムリとの関わりを通して

昨年度は，事例のオオケマイマイ（Ｐ３）の他にも一年間でいろいろな生き物と出会い，関わり，心を動かす経験をしてきた。４歳児では，生き物を“たくさんつかまえること，見つかること”が嬉しく生き物が動く様子に興味をもち，思いを寄せる『きっかけ』となっていた。５歳児になり，登園が始まった６月。この時期に出てくる生き物たち（カエルやカタツムリなど）が園庭に姿を現した。子どもたちは昨年度の経験を思い出したかのように生き物を探し始めた。

カタツムリに思いを寄せて①　～再会が『きっかけ』になり思いを寄せる～

令和２年６月１８日（木）

飼育ケースにいたカタツムリと，子どもたちが広い場で関われるよう，プラスチック性の造形用の板があることを知らせた。さとしは，雨の中，カタツムリの仲間を探しにいくと，あっという間に捕まえ，数匹に増えた。子どもたち数人が集まり，板の上のカタツムリの行方をじっと追いかけ見ていた。

令和２年６月１９日（金）

さとしとたけるは，昨日同様，園庭に板を持っていき，カタツムリと一緒に遊ぼうとしていた。そこで，私は昨年度も使っていた，木の枝を数本だけ用意してみた。さとしは数本の枝をつなげて使ってみるが，もっと要ると感じたのか，自分でも枝を見つけてくる。興味のある子どもが集まり，カタツムリの動きを一緒に見ていた。

令和２年６月２２日（月）

さとし，たけるは，園庭に板を出した。カタツムリに水がかかると，ツノ（目）を引っ込める様子を見たさとし，たけるは「目が痛いかもしれない」と話し，葉っぱの付いた木の枝に向かっていく姿を見て，「急いではる。さっき（水で）目が痛かったし，葉っぱの所で治そうと思ってはる」とカタツムリの気持ちになって話していた。また，動いているカタツムリを見て「こっちへ行きたいのかな」とカタツムリの気持ちに寄り添いながら，カタツムリの世界に入り込む姿が見られていた。

令和２年６月２３日（火）

さとし，たけるは，更にカタツムリのことに興味をもち始めた様子で，昨年度から使っている図鑑を持ち出し，カタツムリのことを調べて始めていた。

【考察】

昨年度は，カタツムリの動く姿がおもしろいと感じたり，触ったりすることを経験してきた。あれから一年が経ち，梅雨の季節になり，カタツムリと再び出会ったことが思いを寄せる『きっかけ』となった。

さとしとたけるは，この出会いから，毎日のようにカタツムリに関わるようになった。朝，登園して，すぐに板を出し，自ら遊ぶ準備をする。更に２人はカタツムリのことを“知りたい，調べたい”と思ったのか，図鑑を持ち出した。そこに載っていることを一生懸命見ている姿から，カタツムリに思いを寄せ始めていることが考えられる。

そうして関わる中で，次第にカタツムリに成り代わり，“目が痛いのではないか”“葉っぱの所で治そうとしている”などと，気持ちを想像し「思い」を代弁したり，推察したりする様子から，カタツムリのことを大事に思い，「思いが深まり」始める姿が感じられる。

また，４歳児の時と違い，“言葉”で表現することが多くなっている。友達と一緒に想像して話をすることが楽しく，カタツムリと毎日一緒に遊んでみたい気持ちにつながったのではないだろうか。

カタツムリに思いを寄せて②　～思いを深く寄せることで「好き」の気持ちが膨らむ　～

どっちが好きかな？　　令和２年６月２３日（火）

　板の上に半分に割れた植木鉢と，飼育ケースを並べて「どっちが好きかな？」とカタツムリの行方を見守っている。植木鉢のほうへ行くカタツムリ。するとさとしは「こっちの方が好きなんや。涼しいからかな？」と話す。

どっちに行くかな？　令和２年６月２４日（水）

　板の上のカタツムリが動く姿から競走しているように見えたようで，「道をつくればいい」と細い紙で，道をつくり始めた。十字路に組み合わせ「どっちに行くのかな」と観察した。

どっちが好きやろ？　令和２年６月２９日（月）

　さとしはカタツムリにあげようと人参とキュウリを持ってきた。早速，カタツムリを出している板に置き，「（人参とキュウリ）どっちが好きやろ」と見ていると，どうやら人参の方に行ったようで「人参人気や」とたけるに話す。

　さとしは紙で道をつくった。筒に紙を立てかけ斜面にして登っていけるようにした。そして，てっぺんにキュウリを乗せておく。「匂いがするから行くかも」と話す。筒の下に入ったカタツムリは「影が好きなんやな」とたけるに話し，一緒に見守った。

【考察】

　自分の大好きなカタツムリに思いを寄せる気持ちが更に膨らみ，思いを巡らせたことをさとしが友達にたくさん話している。それを聞いて共有するたけると一緒に長い時間遊びが続いていた。次第に「このカタツムリはどっちに行くのかな？」「どっちが好きかな？」などと疑問をもち，“やってみよう，比べてみよう，試してみよう”いう思いにつながった。カタツムリが自分で動く姿を見て「そっちに行くんだね」と，カタツムリのしていることを受け止め，認める言葉をかけていた。法則を見出そうとしているのではなく，人参の方に行った結果から，「人参が好きなんだね」と，カタツムリの気持ちやその理由を推測する姿から，より「深く」思いを寄せている様子が伺えた。大切な友達の存在のように「好き」な気持ちが膨らんでいくと感じられた。

カタツムリに思いを寄せて③　～友達と“共感”することで「深まる」思い～

令和２年６月２６日（金）

　前日さとしが「（カタツムリの）家を広くしたい」と話していたので，大きな飼育ケースを準備した。大きな飼育ケースを喜び，早速，図鑑で調べ，畑の土を入れたり「木がいる」と話したりしながらつくっていく。また，以前から使っていた鉢の欠片も「（カタツムリが）気に入っているから」と入れた。“カタツムリの家”ができたが，さとしは「すぐに（新しい飼育ケースに）入れるのはかわいそう。遊ばせてあげよう」といつもの板で遊ぶ。飼育ケースからカタツムリを出すが，ゆっくりしているカタツムリを見つけ「ねぼすけさんは置いておいてあげよう」としばらく様子を見るようにしていた。しかし，遊ぶ準備をしている間に，“ねぼすけさん”は動き出し「ほら，起きはった。新しいお家になったんだよ」と言っていた。その様子を見たり，聞いたりしていたたけるは，さとしの思いに共感し，受け入れている様子だっ

た。板の上では，木の枝を進むカタツムリを見て，さとしは「こんな細い所も行けるんだ。すごいな」と話すと，カタツムリの家にも「中にも細いのを入れたらいいかな」と思いついたことを言った。さとしとたけるの他に，なおやも加わり「もっとお友達を探そう」と探しに行き，一匹見つかるとさとしは「そーっと置いてあげよう。急にお家が変わってびっくりするかもしれへんし」と，カタツムリの気持ちになって考えて話し，たけるもその様子を見守った。

令和２年６月３０日（火）

卵が産まれる。図鑑で調べると，“土の中で卵を産んで…およそ一か月で生まれる”ということが分かった。たけるは近くにいた教師に「一か月くらいで生まれるんだって」と嬉しそうに教師に話していた。

令和２年７月６日（月）

さとし，たける，共に登園時にカタツムリを持ってきた。しかし，「すぐに入れてあげるのはびっくりするかもしれない」と話し，元気に動き出したら入れてあげようと話し合い，そうすることになった。

令和２年７月８日（水）

更に，いろいろな試しや遊びが広がっていくように，教師の提案で“樋”も使えることを伝えた。砂場の隣の東屋と砂場の間を樋でつなぎ，カタツムリが進んでいくか見つめていた。やがて競走させることになり，様子を見ていた所，樋は滑るらしく，カタツムリが滑ってなかなか登れない様子で，滑るカタツムリが体を伸ばしたり縮めたりしていた。その姿を見ていたたけるは自分の体を伸ばしたり縮めたりしながら表現し「こーんなんなるんやなー」と話した。

さとしは，登っていくカタツムリが黒っぽい色をしていて，さとしの着ていた服も黒く，一緒だという理由から黒い方を応援すると話していた。すると，競走の途中，樋の上でカタツムリがおしっこをした。その色は青かったことを２人は驚いていた。たけるは「人参を食べたら，赤いのが出るのは知ってたけど，青いのは初めてだね」と話していた。

令和２年７月９日（木）

たけるが白いカタツムリを連れてきた。色が白いから「これしろちゃん」とさとしが私に教えてくれた。さとしは図鑑を持ってきてたけるに見せ，白い色から「これの仲間やわ」と話し「そうやわ」と話しながら二人で見ていた。先日の黒いカタツムリは「くろちゃん」と名付けていた。それぞれのカタツムリを板に放っていると，さとし，たけるそれぞれの方向へ向かってくる様子を見て「さとしくん（たけるくん）のこと大好きなんやな」と嬉しそうに互いに伝え合っていた。

【考察】

カタツムリと継続して関わる中で，「家を広くしたい」となった，さとしとたける。カタツムリにとってより広い家の方が暮らしやすいと考えたようだ。図鑑に載っていることだけでなく，“今，ここにいるカタツムリの好きな物は”と考えながらつくる姿は，まさに，目の前にいる生き物に「思いを寄せている姿」と捉えられる。毎日２人で一緒に，様々な遊び方を試す中で，様々な発見があり，“自分たちのカタツムリ”のことを知る機会となった。カタツムリのことを友達の様に捉え，一匹一匹に大切に名前を付ける程，愛情を注いでいた。日々，さとしとたけるのカタツムリへの気持ちが「深まり」より身近な存在に感じているのではないかと考える。

そうして，“僕たちの”のカタツムリのことを考えながら，自らの思いを伝え合ったり，出来事を共有したりする中で，互いに認め合える関係性が築かれていき，毎日一緒に遊ぶことを楽しんでいた。さとしやたけるの思

いはそれぞれにあるものの，大事に思う方向は同じで，だからこそ，互いの思いを受け入れている姿や，時に，言葉はなくても笑い合ったりするだけで，気持ちが通じあい，カタツムリの世界を共有している様子が伺えた。「思いが深まる」につれ，人とカタツムリの関係だけではなく，さとしとたけるの心もつながっていっているのだなと捉えられた。

カタツムリに思いを寄せて④　～思いを“共有”そして新たな『きっかけ』へ

令和２年７月１４日（火）

同時期，カブトムシの家をつくっていた子どもたちもいた。夜には，そのつくった家でどんな風に過ごすのかタイムラプスを使って撮影をした。さとしとたけるにも，他の子どもたちの遊びの様子や，自分たちがいない間の様子を撮影することができることを知らせようと思い，その動画を見せた。するとそのまま，カブトムシの家を見に行き，何かを確認するようにした後，カタツムリの家の続きをつくった。「ここはご飯を食べる所」や「ベッド」などと話し，家の中をたけると一緒につくった。更に，枯れた葉は避けて新しい葉っぱを入れていた。飼育ケースに画用紙も貼ってカラフルにつくっていた。

令和２年７月１５日（水）

降園前に「この家でどうしてはるか夜，撮っとこうか」と提案する。そして，この日の夜タイムラプスにより，撮影を行った。

令和２年７月１６日（木）

翌朝，撮った映像を見せた。３匹が少し動いていた。たけるは「あっ，起きたわ」などと動き出したカタツムリのことを話していた。

令和２年７月２２日（水）

一学期の終業式。夏休みに入る。この日もいつものように遊びだす２人。しかし，明日からしばらく一緒に遊べないことを伝えると，少し考え「特別の部屋をつくるわ」と話したさとし。逃がすことはせずに，そのまま置いておきたい様子だった。そして，片付けの時間になり，いよいよしばらくのお別れの時が来ると，２人は「ここにおいておきたい」と話した。私は「カタツムリを逃がさずにおいておくならどうするか？」ということを２人に尋ねた。私は，長い休みの間，お世話をする人は，いろいろな先生であることを知らせ，どの先生でもお世話ができるようにしないといけないのではないかと伝えた。すると，たけるが「ずっとこうして（タイムラプスで）撮っといてほしい」と話した。しばらく会えないことが気がかりな様子だった。受け止めながらも，その難しさを伝えた。タイムラプスのようにずっと様子を見ていられないけれど，どうやってお世話をするか誰でもわかるように書いておくことを提案した。すると，さとしとたけるは「①えさをあげる②お水をあげる③いつも様子をみてほしい」と話したので，それを私は紙にかいた。２人はそれをカタツムリの“おうち”に貼っていた。

【考察】

カブトムシのタイムラプスの動画を見て，ベッドや食事をするところがあったことを受けてか，さとしもたけるも「ご飯を食べる所」と「ベッド」などとまた新たにつくっていた。自分たちが見ていない間も“お家で暮らしている”と感じたのか，カタツムリが心地よく過ごせるように，再構成するきっかけとなったのではないか。また，“枯れた葉っぱ”を“新しい葉っぱ”に変えていた姿から，カタツムリのために“きれいなお家にしてあげたい”と，カタツムリのことを考えてた「思い」であったと考えられる。

２２日は明日から長い夏休みに入るため，カタツムリのことをどうするか尋ねると「特別な部屋をつくる」と話したさとしとたける。一度逃がすのではなく“ここにおいておきたい”“これからもずっと一緒にいたい”という気持ちが感じられた。そして，これからどうやってお世話をしたら良いかを２人と考えた時，たけるの「（タイムラプスで）撮っていてほしい」という言葉からは，“自分たちがいない間の様子が知りたい”“ずっとそばにいたい”という「深い思い」が感じられた。夏休みになることを知り、改

めてカタツムリへの思いを巡らせたことが「思いを深める」『きっかけ』となっていた。出会った時から，いろいろな関わりをしながら一緒にいる時間を積み重ねてきたことで，カタツムリへの「好き」が膨らんでいった。

昨年度から季節は巡り，また梅雨の時期が訪れ，慣れた園の環境の中で，カタツムリを見つける。カタツムリに興味をもった友達と一緒にカタツムリと再び出会ったことが『きっかけ』の土台となり遊びが始まった。カタツムリの動く様子を見ていろいろな用具を使い「どうなるのかな？」と，関心をもち，試したり，比べてみたりしたことが『きっかけ』となり，カタツムリの姿を見て「〇〇なんだね」と，２人はカタツムリの気持ちを推察するようになり，次第に自分と重ね合わせるように行動する姿につながっていった。

また，カタツムリとの関わりから，友達との関係も深めている。思ったこと，考えたことを言葉に出し，その思いを友達に伝えたり，互いに受け止めたりすることにより，一緒に遊んでいる世界が共有され，関係が築かれたり深まったりしていった。共有できる友達の存在があることで“僕たちのカタツムリ”への「思いが深まり」，遊びが継続したり深まったりしていく『きっかけ』となった。

そして，カタツムリと“これからも一緒にいたい気持ち”は，これまでの継続した遊びを通して，いろいろな思いを巡らせる中で，カタツムリへの「思いの深まり」が捉えられた。

Ⅲ　まとめ

１　生き物に「思いを寄せる」ことと「科学する心」について～『きっかけ』に着目して～

実践事例を通して，思いを寄せる『きっかけ』となる要因を探るとともに，生き物への「思いを深めていく」子どもの変容や育ちを探った。

『きっかけ』となる要因について

思いを寄せる『きっかけ』となる要因とは何か。まずは，本園が自然に恵まれ，生き物が豊かに生息する環境であること，そして，身近にいる教師や保護者，友達など，温かく受け止めたり共感したりできる存在があること，それらが相互的に関わり，子どもたちの心が動き，対象物に思いを寄せる**『きっかけ』の土台**となっていると考えられる。

豊かな自然と温かな人間関係のもとで子どもたちが自然物に「思いを深めて」いく過程には，子どもの心が揺れ，思いを寄せて，継続して関わって遊ぶことが必要であり，そのためには，遊びが継続するための『きっかけ』が必要ではないかと考えた。そこで，それぞれの事例を図式化することで，その要因が明らかになってきた。

まず，**“自然そのもの”**が何にもまして大きな『きっかけ』となることがわかった。子どもは，そのものを見たり，触れたりすることで，“おもしろい”“楽しい”“かわいそう”などの感情をもち，“〇〇したい”という欲求が生まれ，生きているからこそ起こる様々な出来事に，戸惑い，迷い，動揺し葛藤しながら，様々に心を揺らしている。自然の意外性，植物や生物の生長や成長，時には死に出会ったりもするが，そのような自然の変化や自然のもつ魅力が，子どもの興味・関心や心を揺さぶり，思いを深めていく『きっかけ』となっている。

また，子どもたちを取り巻く温かな人間関係も思いを深めていく『きっかけ』となっている。人間関係の中には，子どもの心に寄り添い，その姿を見つめ，遊びが継続していくことで，経験の幅が広がったり心が育ったりするように，意図的に環境設定したり援助したりする**“教師の存在”**がある。

教師の意図的な環境づくりということでは，今年度，臨時休業期間中に新たに試み始めたツールである**“ICT の活用”**がある。今年度は新型コロナウィルス感染拡大防止対策により，園児が一斉に同じ場に集うことが難しいこともあったが，子どもたちが関わっている生き物や植物の様子をタイムラプスを使って撮影し，その動画を見せることで，実際に関わっている子どもだけでなく，皆がその様子を共有する機会とすることで新たに関心を抱き，思いを寄せる『きっかけ』となった。更に，見られない時間帯の様子に，興味が広がる姿もあった。また，YouTube でアップすることで保護者も興味・関心をもち，思いが「広がり」，それが『きっかけ』となり，子どもが「思いを深める」ことにもつながった。ICT の活用は思いを「広げる」手段としても有効であり，今後も ICT を活用する可能性を探っていきたい。

更に，一緒に遊び，同じ対象物を見つめ，思いを共有していくことでより遊びが楽しくなっていくという，**“友達の存在”**も重要になってくる。特に５歳児では，“生きている”という対象物は，自分の気持ちを投影しやすく，友達と互いの思いを言葉でやりとりすることで，様々な試し，予想，比較，思いを推し量る推論，思考等の科学する心の育ちが顕在化した。このことは，言葉のやり取りが，思考を深めることを表していると考える。

そして，**“家庭との連携”**という側面も『きっかけ』の要因であることがわかった。保護者も子どもの気持ちに寄り添い共感し，共に園生活に関わっていくことが大切であると思われる。４歳児のカエルやオクラの事例では，野菜嫌いの我が子とともに，登園時の水やりを楽しむ母親，登園の道すがらカエルを見つける子どもの行動や言葉を捉える母親，保護者が子どもとともに，同じ自然物に対し思いを寄せることで，子どもの思いが深まったり広がったりしていることがわかる。

本稿では，子どもが自然に関わり，思いを寄せ，思いを深めるために必要な遊びを継続するための『き

っかけ』に着目して研究を試みたが，このように様々な『きっかけ』を見つけることができ，今後の科学する心の育ちを展開する保育により一層活かしていきたいと考える。

（“○○”の**文字**と**下線の色**は，事例の分析図の下部の「思いを寄せる『きっかけ』をつくりだす要因」の分析に基づいている）

思いが「深まる」と同時に「好き」が膨らむ

一つの場面でも「思いの深まり」は捉えることができるが，“継続して関わる”姿を捉えていくことで，「思いの深まり」がより明らかになっていった。また，「思い」が「深まる」と同時に，対象物を「好き」という感情も膨らんでいくことが，事例の分析から読み取ることができた。

４歳児は，保護者や教師など身近な大人の温かな関わりに安心し，生き物との思いを深めていく。自分の大事なミニトマトを与えたちか。葛藤しながら生き物の幸せの方を選び，逃がすと判断したそうすけ。“自分の”オクラを母親と一緒に毎日世話を続けられたからこそ，“食べられた”ゆうと。それらの近くには，その考え，判断，思いを受け止め，支えていた保護者や教師の存在があり，安心感で支えられた中で，“自分の”生き物への思いが「深まる」ことで，「好き」がどんどん膨らんでいった。

５歳児は，４歳児の時の生き物に「思いを寄せた」経験がつながり，更に生き物の気持ちを想像しながら関わることを楽しむことで思いを「深めて」いった。また，生き物と関わることを通して一緒に遊んでいる友達の思いにも共感し，関係を深めている。思いを言葉で表せるようになることで，互いの気持ちが通じ合える。2 人の思いを互いに認め合うことで，生き物への「思い」も更に「深まり」，“ぼくたちの”生き物とずっと一緒にいたい，ずっと見ていたいという思いを抱き，「好き」が膨らんでいった。

このように「思いが深まり」，「好き」が膨らむことで，生き物の立場に立って考え，“命”を大事にしようとする心が育っている。

本研究では，このように自然物に「思いを寄せ」，その思いを「深め」たり「広げ」たりすることを通して子どもたちは，目の前の自然物に対する「好き」が膨らみ，“愛しく”もあり，“大事”にしようとする気持ちが育まれていくことがわかった。『昆虫記』で有名なアンリ・ファーブルも，それを書くこととなった原点となるものは，自然に囲まれた環境の中で生まれ育ったことと，それが『きっかけ』で虫や植物のことが「好き」になったということである。観察が終われば元の住んでいた場所に虫を戻してあげることもしていたようで，自然や生き物の“命”を“大事”にしていた。自然物へ「思いを寄せて」「好き」になっていく心が「科学する心」につながっているのだ。

私たち幼児期の子どもたちを育てる者としての役割は，「思い寄せた」姿を捉え，子どもが継続して関わることでより「深い思い」をもつようになり，「好き」に向かう過程を支えられるよう，環境を整え，援助していくことだと感じた。

２　課　題

自然物への興味や関心は，一人一人異なるものである。あまり興味を示さなかったり，生き物が苦手だったりする子どももある。自然物という，何物にもかえがたい教材に恵まれている本園の環境を考えると，より多くの子どもたちに自然というものに興味・関心を抱いてほしいと考える。そのための環境構成や援助を工夫することにより，思いを寄せる『きっかけ』となる要因を今後も探っていき，自然物に関わり，見つめる中で，思いを「広げ」たり「深め」たりしていく姿から科学する心の育ちを捉えていきたいと考える。

今年度の研究を通して，科学する「心」を育むということはどういうことなのか，深く考える機会となった。子どもたちの豊かな感性や創造性を育むには私たち教師自身も常に高めていかなければならないところである。私たちが科学することをもっと「好き」になり，それを子どもたちとともに「広げ」「深

めて」いけるよう，今後の保育に生かしていきたい。

Ⅳ　おわりに

微生物の研究でノーベル賞を受賞され大村智教授のインタビューや書籍に，“スプーンとビニール袋を持ち歩き，出先で土を採取していた”“泥臭い研究”などと示されていたのを思い出した。微生物から有用な化学物質を発見し，感染症の薬を開発され，多くの人々を救われた素晴らしい功績，その原点は，自然の中で過ごされた子ども時代にあるという。その話から，なぜだか本園の子どもたちが，園庭の畑で夢中になって土を掘り起こして虫を探していた姿が思い出された。自然と関わることが好きで楽しくって，その中で自然物に対しておもしろさを感じ，生命を愛しく思ったり，不思議さに気付いたりする。更に，追究しようとする姿勢が生まれるかもしれない。そのような心が，科学する心の原点ではないかと思えてならない。

参考文献：　『博物学の巨人アンリ・ファーブル』　奥本大三郎（集英社新書）
『大村智ものがたり』　馬場錬成（毎日新聞出版）

研究代表：山﨑直子
研究同人：廣内厚士　矢木万友美